でも要点をツマミ食いするようになってくる。今考えてみると，必要上やむを得ず，とはいえ，このような読み方をしていたのはやはり問題があったようだ。

ところで，現在は講義の準備に追われて他のことに気をまわす余裕が無いせいもあるが，各方面の人と会って意見を交す機会も殆んど無いし，また，座っていて手に入る文献，資料も極めて少い。

役所と大学とでは仕事の内容そのものが違うのだから，今日的意味での情報をそれ程追う必要は無い，という考え方も勿論あるだろう。私個人の問題としても，基礎的，古典的な地理書に限ってみても読まねばならぬものは余りにも多い。自分の僅かの時間は先ずそちらへふり向けるべきであるかも知れない。

しかし，（人文地理学に関していえば）現代の教育，研究においては，従来のオーソドックスなアプローチに加えて，関係分野の生きた情報を取り入れ，また，各方面の人たちと接触し，積極的な意見の交換を通じて多くを学びとることもまた欠かせないことのように思われる。このふたつをどう両立させるか，が私のさし当っての課題であろう。

地域開発と地理学

内藤博夫

新聞報道によれば，国土庁は１２月１２日，いわゆる三全総の計画概案を発表した。概案の骨子は，工業開発優先の新全総から脱皮し，人間重視の地域開発へ方向転換した点にあるとされている。政府が決定する全国総合開発計画は事実上地域開発の憲法的役割を果しているものである。三全総とは第３次の全国総合開発計画を意味している。

概案は新全総の批判的検討の上に立って作成されたものであるが，経済の仕組みにメスを入れたわけではない。経済の仕組みを高度成長時代のままにしておいて，果して生活優先の方針が実際に貫けるものかどうか，これまで通り結局は対症療法的施策に終ってしまうのではないかといった疑問も生じてくる。しかし世界に例をみない環境破壊を経験したわが国のことであるから，必要な事業は行わざるをえないであろうし，そうあってほしいと思う。

概案が生活優先を打ち出した背景には言うまでもなく深刻な環境問題がある。環境問題とはいったい何であろうか，一般には公害問題と同義に理解されているようであるが，別の角度からみればこれを土地利用の問題としてとらえることができると思う。環境問題をこのように理解すれば，土地利用のあり方に関心をもち続けてきた地理学は，環境問題の解明に貢献する資格を十分に備えていることになる。つまり土地利用実態の正確な把握とそれに基いた土地利用計画の作成が環境問題解決の重要な条件となっているということである。

地理学はどちらかといえば土地利用計画に関する分野よりも，実態調査の成果を直接反映させることができる土地利用実態の把握の分野でより多くの成果を上げてきたように思われる。このことと関連して，国土利用白書（昭和５０年版）が国土情報の体系的整備の必要性を強調しているのは注目すべきことである。事実，既存の統計資料は個々の政策目的に合うように作られているために，総合的

な性格をもつ土地利用実態を統一的基準に従って把握した資料は皆無に等しい。それだけに地理学が今後果されなければならない役割は大きいといえよう。

姑　の　死

貝　山　久　子

姑は昭和５０年４月１１日，７５才で亡くなりました。ひそやかな葛藤もなかったと言えば嘘になりますが，概して言えば仲の良い嫁姑で，一つ屋根の下で暮した期間は実の母よりも長く，何よりも私が曲りなりにも仕事を続けられたのは姑に負うところが大きかったわけですから，昨年の発病以来出来るだけの事をし，姑も私を一番頼りにしていたように思います。

姑は丈夫で健啖家でしたが，昨年２月ころ胃の不調を訴え，精密検査の結果胃癌とのことで直ちに入院，胃の$\frac{4}{5}$を切除しました。幸手術は成功し，余後も順調に回復し４月末退院しました。その後徐々に健康をとり戻し，食欲もあり，外出も出来るようになって喜んでいた矢先，今年の２月はじめ急に食欲を失い床に就くことが多くなり，癌性腹膜炎との診断で再入院したのでした。

昨年の姑には，生への執着と病に立ち向う強い姿勢が感ぜられました。７４才で大手術をひかえているのに，まことに元気旺盛であれこれ注文し，身だしなみを気にしました。

ひとさじのいのちを
ベットの上にすくいあげ
ゆれうごくその液体をこぼすまいと
スプーンを握りしめる

〃死から引き返して〃　高村文江詩集より

退院してからも早くもとのようになりたくてよく食べ，時には小さな胃に拒絶反応をおこさせることもあった程でした。それにひきかえて再入院の時は，回復ののぞみのないことは，私共だけの秘密にしていたのに，姑には死を既定のこととして受けとめていたようなふしがありました。食欲もなく髪を梳くことも欲せず，すべてを放棄してただボンヤリと横たわっているだけで，日一日とおとろえていき，病棟前の満開の桜が，折からの春嵐に霏々として舞い散る中を，ひっそりと息を引き取ってしまいました。

生命の灯を消さない為の医師団の努力には全く頭の下る思いがしましたが，それにもまして重要なのは本人の気力のように思います。身近な人の死に直面して，多くの人々の献身を思うとき，人の生命の重大さを痛感し，安易な生き方はすまいと心に誓ったことでした。